

三陸の海を放射能から守る

岩手の会

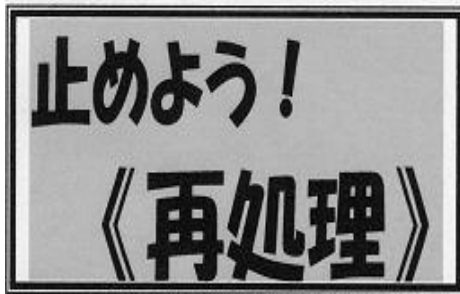
郵便振替 02240-5-102650

《再処理 / 岩手の環境》

http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm

《まった再処理分庫》

http://briefcase.yahoo.co.jp/k_imag



《天恵の海》

2009(平成21)年

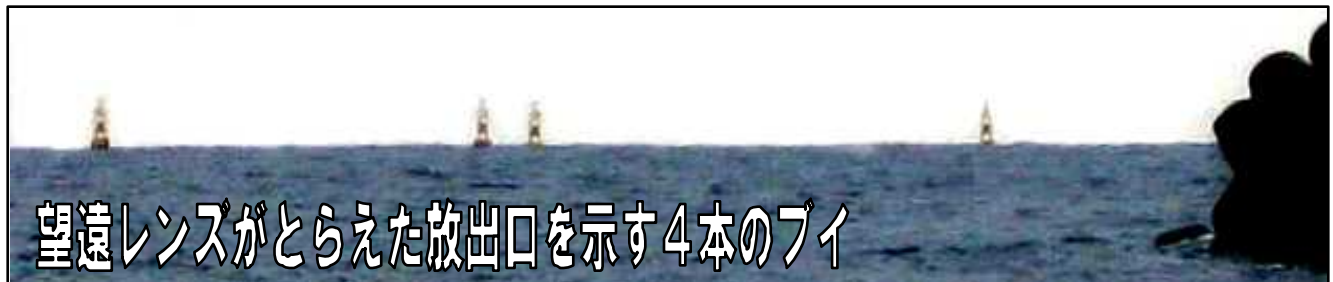
4月14日

第69号

編集事務局 S.Oshida

TEL・FAX 019-623-1636

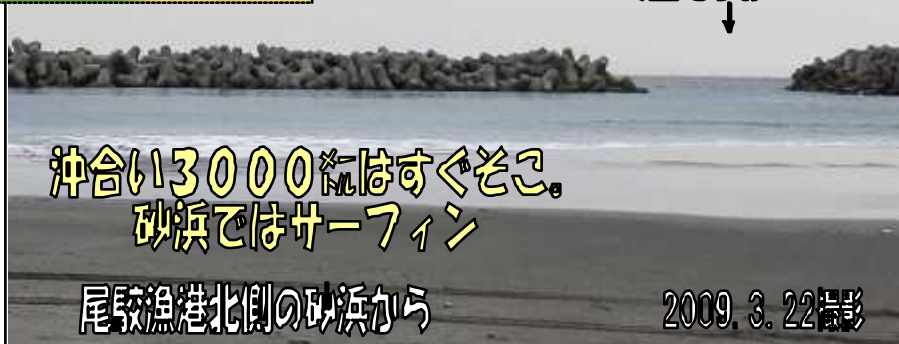
六カ所再処理工場 相次ぐトラブルで運転停止



望遠レンズがとらえた放出口を示す4本のブイ



このあたりを拡大
(上写真)



沖合い3000mはすぐそこ。
砂浜ではサーフィン

尾駱漁港北側の砂浜から

2009.3.22撮影

尾駱漁港取材

三月二日、岩手の会(三三三)編集委員二人(大信田 原田)が青森県六ヶ所村尾駱(おぶち)漁港を訪れ取材しました。案内は長く核燃反対を訴えて来られた三沢市在住の福澤定岳さん。眼につくのは高く頑丈な岸壁、長く延びた防波堤、あちこちにたくさんある防波ブロッグの群れでした。尾駱港北隣のきれいな砂浜から太平洋を眺めると、沖合い三千メートルに、放射性廃液の放出口の存在を示す、四本のブイが見えました。(文 大信田)

海洋放出は減少中 しかし断念せざるを得ない

こんな近くに放射能!
四本のブイが四角形をつくる真ん中の四メートル下の海底から放射性廃液は上方に向けて勢よく吐き出されます。
日本原燃は、「海水で薄まるから大丈夫だ」という説明をしています。吐き出された放射能は、下表のように膨大です。これまでの総量は約五五〇〇人の経口急性致死量に相当する量です。何万年も消えない放射能を太平洋に捨てることは地球にとつて大きなダメージです。そして、この目の前の放出口からの放射性廃液は波にもまれ、強風に煽られ飛散します。陸上の生物や住民にも飛沫となつて直接降り掛かる危険も考えられます。私

達が訪れたのはまだ三月しかし、二人のサーファーが波の中でサーフボードを操っていました。放出日の予報はなく、放出の発表は一ヶ月遅れの原燃ホームページ上です。これ以上廃液をつくるな

今、再処理工場は、ガラス溶融炉のトラブルで、アクティブ試験が停止状況にあり、使用済み燃料の裁断も終了しています。したがって廃液中の放射能は減少してきました。ガラス固化の技術もなく高レベル廃液を作ることには許されないことです。今ある廃液も徹底した安全管理が求められます。

これまで海へ流された放射能の量
(2006年4月~2009年2月まで)

公表数値

放出回数	205回
放射能の総量	
トリチウム	2177兆ベクレル
ヨウ素129	5億4300万ベクレル
ヨウ素131	5600万ベクレル

三陸はるか沖地震では 船だまりが破碎

地震に弱い再処理工場

「地震国日本」ですから、六ヶ所村も当然何回も地震に襲われています。最近では、「十勝沖地震」や「三陸はるか沖地震」が挙げられます。再処理工場が出来る前のことです。高レベル放射性廃液をため込んだ再処理工場が今地震に襲われたなら

どうなるのでしょうか。

三陸はるか沖地震の被害の場所を見る

作家広瀬隆さんは、阪神淡路大震災の直前に起きた「三陸はるか沖地震」に注目し、直後に六ヶ所村を訪れ被害を調査し講演で報告しています。それによると、「はるか沖地震」は八戸が震度6の烈震、むつ市が震度5

の強震で、六ヶ所村もかなりの揺れでした。六ヶ所工場正門前の道路に亀裂が走り、その亀裂が高レベル貯蔵庫に向かって断層上を走っていました。また、尾駈漁港の岸壁の船だまりやむつ小川原港の一角が被害を受けてメチャメチャになっていました。再処理工場は一九九三年四月に建設工事に着手したばかりだったので、目立つ被害がなくて済んだのです。

地震の歴史から学ぼう
広瀬さんはこの現地調査の記事を雑誌「宝石」一九九五年五月号に発表

されました。しかし、その頃のマスメディアは「オーム事件」一色で残念ながら予想した反響は得られなかったそうです。その冬の雪解けを待つてすぐに復旧工事がなされたそう、今は何事もなかったような尾駈港の船だまりです。しかし、記憶がどんなに薄らいても地震はいつ起きるか分かりません。高レベル廃液を溜めてしまった現在の工場は、過去のような限定された被害では済まないだろうと強く不安を覚えました。

公共事業をチェックする議員の会 「直下活断層」問題ヒアリング 3月27日 衆議院第二議員会館

公共事業をチェックする議員の会の主催で、「六ヶ所直下活断層について見解を聞く公聴会」が開催されました。学説を発表した東洋大学渡辺満久教授は「原燃は活断層本体を見落とし、大断層外縁断層との連続性をなぜ輪切りにするのか」などの所論を述べました。これに対して原子力安全・保安院の金城慎司補佐は「安全審議は日本原燃の報告を審査している。学術論文を審査しているわけではない」などと述べました。出席した国会議員は保坂展人事務局長ら六人でしたが、「安全審査委員に当事者の声が届くように、主査に面会・要求するなどの行動が必要」と確認されました。

高レベル廃液はまだなかった
一九九四年二月二十八日の「三陸はるか沖地震」で六ヶ所村尾駈港の岸壁（船だまり）はメチャメチャに被害を受けました。その頃、再処理工場の建設が始まりました。

三陸はるか沖地震後の六ヶ所村尾駈港

雪解けて分かった六ヶ所村地震の置き土産



写真・田嶋雅己 1995年3月19日撮影

写真・田嶋雅己氏、雑誌「宝石」より

今はきれいに復旧
この場所が被害を受けた上の写真の場所です。「雪解けを待って、あつという間にきれいに復旧工事がなされました。」福澤定岳さん談



水あがる



三月末日朝、NHKラジオで次のような内容のニュースを聞いた。「青森県六ヶ所村の使用済み核燃料再処理工場のメーカーの保証期間が一月に満了していたことが判った。当初一年半で終了する予定だった試験運転が、続くトラブルで完了できず今年八月まで伸びている。メーカーとの間で取り決めた三年の保証期間が一月で終了し、以後に発生した故障に関しての

なぜ国民にきちんと知らせないのか

修理費用は原燃の出費となる。再処理工場にはすでに二兆二千億円が投じられており、さらに想定外の出費の上乗せは論議を呼びそうだ。」妻と二人で聴いたので内容の大筋はまちがいが無い。プレス・リリースされた情報かと思っていたが、その後、TVや新聞には載らないので不思議なことと思われた。NHK放送局に問い合わせたところ、ニュースソースは明

らかにできないが、東北向けニュース(仙台局発)で一回だけ流したとのこと。このニュースが流れた前日には原燃社長の「定例記者会見」が開かれていて、社長はメーカー保証期限切れについては一言も触れていない。この想定外の費用の発生は重大ニュースである。なぜきちんと国民に知らせないのか。国会などでも論議されるべきだ。

(K・I)